私たちは一つ　　ピリピ 1:27～30

誰しも自分の身体が健康であることを願いますが健康であるためには何が必要でしょうか？人一倍強い肉体でしょうか？　精神力でしょうか？　ある程度必要でしょうが最も必要なものは免疫力ではないでしょうか？　つまり外からやってくるウイルスや悪いものに打ち勝つ力がないと病気になります。外からだけではありません。体の内側からも悪いものをやっつけたり、良いからと言って必要以上に出てしまうと体を壊します。免疫力が必要です。免疫力はある程度は持っているわけですが普通はワクチンを使って免疫力をつけますね。ワクチンとは前もって極軽い病気になっておいて病気のための予行演習をやっておくようなものです。こういう風にも言えますね。ワクチンを用いて軽い病気という問題を解決すると次の大きな問題に対処することが出来る。つまり、問題を解決していくことによって力をつけていくわけです。健康なからだというのは心身に起こってくる問題に免疫力によって対応できるからだのこととも言えます。このあたり詳しいことは私は専門家ではありませんので医療または製薬関係の方に聞いていただきたいと思います。なぜこのような話をしたかと言いますと聖書には教会とはキリストのからだであると書かれています。からだのようなものとかからだに例えられるとは書かれていません。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。」

コリント第一 12 章 27 節

「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって

満たす方の満ちておられるところです。」エペソ 1 章 23 節

ですからわたしたちのからだで起こっていることは教会にも当てはまるわけです。私たちはキリストのからだとして一つです。自分自身の信仰者としての在り方は個人的なもので終わるものではないのです。キリストのからだなる教会につながっているわけですから良い意味でも悪い意味でも教会に影響を与えます。そして神様は教会が成長することを願っておられます。今日はキリストのからだなる教会が成長するために何が必要なのかをみことばから教えられたいと思います。

苦しみの中で喜ぶパウロ

パウロはこの手紙の中で苦しみを経験しつつも、喜んでいることを書き記しています。苦しみの中で喜ぶということは、この世の常識では考えられないことです。ここには、キリストの救いにあずかった者の喜びが示されています。このピリピ人への手紙は２つの呼び名があります。一つは「喜びの書簡」、手紙ということです。この短い手紙の中に「喜び or 喜ぶ」ということばが 13 回も出てきます。パウロはどんなに喜びに満ちあふれていたことかと思わされます。もう一つは「獄中書簡」と呼ばれます。これはパウロが福音を伝えているが故に迫害を受け、牢に入れられたことからそう呼ばれています。環境、受けている試練は決して喜ばしいものではなく、むしろ苦しみと悲しみですがその中にあってパウロは喜びに包まれているというのです。

１章２０節以下でパウロは、死んでこの世を去り、キリストと共にいたいと語りつつも、教会のために、この世に留まり、教会の人々と信仰を深め合う道を選び取るということが記されています。「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。」v.23 それは、教会を通して、確かに、福音が宣べつたえられ、神様の救いの御業が進められているからです。そして、教会の交わりにこそ、神様の救いの御業が現されており、そこにこそ、真の救いへと至る道があるのです。そんなことが起こされるのは教会以外にありません。ですから、パウロは、人間的に見れば苦しみとしか言えないような中にあっても喜ぶこ

とができると言うのです。パウロは、ここで、ピリピ教会の人々も、パウロの喜びを共にしてほしいと願っています。共に信仰者として歩んでいこうとしているのです。

福音にふさわしい生活

さてパウロは明日のわが身がどうなるのかも分からない状態の中で、手紙を通して、ピリピの教会の人々に、大切な勧めをしています。その勧めの内容は、「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」v.27 というものです。「ただ一つ」と言う言葉は、他の聖書では「ひたすら」と訳されています。つまり、信仰を与えられて生きる時に大切な唯一のことは、福音にふさわしい生活を送ると言うことなのです。信仰を与えられて、教会の民として歩む時、必ず、生活が福音にふさわしく整えられていくのです。

では、パウロが「福音にふさわしい生活」と言う時の、「ふさわしさ」とはどのようなものなのでしょうか。「ふさわしい」という言葉は、「重みがある」とか「価値がある」と言う意味がある言葉です。このふさわしさは、自分で獲得するようなものではありません。人間が自分の力で、救われるにふさわしい者となっていかなくてはならないと言うのではありません。福音とは十字架の贖いによって誰でも信じる者が救われることです。ですから福音に重みがある、価値があるというのは、キリストの福音にあずかった者が、自分の力に頼るのではなく、神様の救いにあずかって生かされていく時に、ふさわしい歩みがなされていると言えるのです。 こうも言えます。自分でふさわしくあろうとするならそれは福音が必要とさていない。つまり十字架の持つ意味が軽んじられているということです。

パウロは、27 節で続けて、「あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、」と語りつつ、福音にふさわしい生活をする時、結果としてふさわしい歩みが生まれていくことを語ります。そこには次のようにあります。「どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはないと。」。この言葉から分かることは、福音にふさわしい生活を送る時、そこには必ず戦いが生じると言うことです。この戦いとはどのようなものなのでしょうか？ここで、先ず、教会の外にいる反対者、つまり、異教徒でキリスト者を迫害していた人々のことを考えることができます。ですからパウロは、現に牢に閉じこめられ、苦しみを被っているのです。しかし、何より、ここで見つめられているのは、教会の内にいる反対者、つまり、教会の中で間違った教えを語る人々がいるということです。具体的には、ユダヤ人キリスト教徒と言われる人々がいて、ピリピ教会を含め、パウロが活動した教会を巡回して、自分たちの誤った教えを言い広めていたのです。誤った教えと言うよりも、根本的に福音と対立する教えを語っていたのです。この人々は、救いのために旧約聖書の律法が定める割礼を受けることを求めていました。それは、律法という掟を守ることによって救いが獲得できる、言い替えるならば人間の業、人間の行いによって救われると言う教えを宣べ伝えていたのです。

私たちの戦い

私たちの闘いとは人間が自分の力で救いを得ようとすることです。自分でふさわしさを得ようとすることは、結局、キリストによって与えられる救いの恵みを無にすることになります。私たちが、神様の前に全く誇るべきものを持たない罪人であり、ただキリストによってのみ救いにあずかる者とされているという恵みを忘れる時に、人間は自分の中に、救いにあずかるためのふさわしさを見出そうとします。しばしば、自分の敬虔な行いとか、熱心な信仰生活というようなものによって自ら救いにふさわしい者と

なろうとしてしまうのです。そのような姿勢は、必ず、教会の一致を壊します。人間の業や行いによる救いが求められるところでは、必ず人間の業を誇り、隣人と自らの歩みを比較して、自己卑下したり、裁いたりする思いが生まれるからです。キリスト者は、絶えず、そのような人間の思いと戦う必要があるのです。

これは誰が反対者であるかということではありません。誰であっても自分の行いを見つめ、福音と異なるものを教会に持ち込み、本当に一致するべき点ではない所で一致しようとし、福音の前進を阻んでしまうと言うことが起こるのです。つまり、この戦いは、自分たち以外の反対者との戦いと言う側面と、自らの内にある、福音に反対する力との戦いでもあるのです。この戦いは、どこかで終わることはありません。この世の教会には、常に、罪に支配された肉の力が働くからです。パウロは 30 節で、「あなたがたは、私について先に見たこと、また、私についていま聞いているのと同じ戦いを経験しているのです。」と語っています。パウロが投獄される前に、教会において、この戦いを戦って来たのです。それと同じ戦いを、ピリピ教会も戦うのです。そして、現代の教会も又、同じ戦いの中にあるのです。これは、罪に支配された人間を用いて、福音が進められる時に生まれる必然的な結果なのです。

聖霊による一致が大切

パウロは、この戦いを戦うに際し、「あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち」と語っています。ここで「霊」と言うのは、私たちの思いということではなく聖霊のことです。「霊を一つに」とは「一つの霊によって」ということで、それは聖霊が教会の人々に臨んでおり、それが教会に一致を与えているということです。聖霊の働きの中で、キリストのもとに一致することが見つめられています。聖霊が働く時に、教会の中に、共に、キリストの福音、救いの恵みにあずかっているという、一つの心が生み出されるのです。そのような一致にしっかり立つとするのであれば、今まで見つめて来た反対者たちとの戦いや、そこで被る苦しみに、脅かされることはなくなるのです。

恵みとして与えられた苦しみ

パウロは、２９節で、次のように語っています。「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」。ここで、パウロは苦しみが恵みとして与えられたものであると言います。信仰が与えられる時、必ず、苦しみも与えられる。しかし、その苦しみは、恵みとして与えられるものなのです。なぜなら、そこでの苦しみを担って行くことこそ、キリストを証しすることになるからです。キリストご自身、外と内からの苦しみを経験されました。一方でご自身を憎み、殺そうとする人々からの苦しみがありました。しかし、それだけではありません。主イエスの後に従っていながら、その語る言葉を全く理解せずに、むしろ、自分の栄光ばかりを求めていた弟子たちの無理解にも苦しんだと言うことができるでしょう。ですから、今、ここで、教会がパウロの苦しみと同じ苦しみを担うことは、キリストの苦しみを担うことでもあり、それによって、福音の前進に参与することでもあるのです。つまり信仰者であるあなたが苦しみを受けているならそれは個人の苦しみに終わるのではなく福音伝道、教会の成長につながっているのです。ですから、それは恵みとして与えられた苦しみなのです。

自分の業を求める人間の歩みの中で

私たちの肉の思いはいつも、心のどこかで、自分の業による救いを求めてしまうことがあります。そのような時、一方で、自らを誇ろうとする思いに囚われます。又、もう一方では、恥となるようなことはできるだけ避けたいとの思いを抱きます。人間が自分の業を主張しようと言う思いがある所では、必ず、人間的に見た時にプラスに考えられることを求め、マイナスにしか思えないことを避けたいとの思いが支配します。しかし、そのような態度でいる時、信仰の喜びに生きる歩みは生まれません。更に、そのような歩みが生み出す、周囲の人々に対する優越感や劣等感、自己に対する誇りや、他人に対する嫉みは、教会の一致を破壊することにつながります。信仰者は、そのような人間の罪の思いの中にあって、教会から離れることなく、常に、苦しみながらも、そのような力と戦うのです。その戦いが、聖霊によって一つの心を抱くことによって戦われるのであれば、必ず、それらの力に対抗することができます。

また礼拝を終えてからそれぞれの生活の場に遣わされてゆきます。様々な困難や試練があることでしょう。しかし、一人で頭を抱え込んで悩まないでください。キリストに目を向けてください。キリストのからだなる教会に目を向けてください。あなたの福音にふさわしく歩む生活、つまり自分の力や頑張りではなく、自らの弱さ、罪深さを知りながらも主に委ねて歩む生き方が信仰者としてのあなたを成長させ、そして教会を成長させてゆくのです。